研修医・指導医リレーエッセー㉗

あたふたしながら、医師として歩き出した一年

倉敷中央病院　初期研修医　舘　健太朗、阪本　晋弘

初めまして、この度リレーエッセーを執筆する機会をいただき、身の引き締まる思いです。当院からは研修医２名の１年間の振り返りと今年度の抱負を綴らせていただきます。

２年目研修医の舘健太朗と申します。私は富山県出身で、金沢大学卒業後、縁もゆかりもなかった岡山県倉敷市で研修生活を送っています。

当院との出会いは、当院を卒業されたOBの先生方が他院で活躍されている姿を目の当たりにしたことがきっかけでした。そこで初めて倉敷中央病院を勧めていただき、６年生の６月に初めて見学に訪れ、そのまま当院を志望したことは、今でも良い思い出です。

当院での研修の最大の特徴は、私なりに「病院の規模が大きいこと」「重症例から軽症例まで幅広い症例を経験できること」「全国から多くの同期が集まること」の３点にあると感じています。自ら積極的に学ぼうとすれば、それをしっかり受け止めてもらえ、豊富な症例を通じて多くを学ぶことのできる環境が当院にはあります。

「Ｚ世代」「パワハラ」「ハイポ」といったネガティブな言葉も飛び交う昨今、指導医の先生方には様々な心理的ストレス負荷を与えてしまっているかと拝察します。そのような中でも、研修医一人ひとりの希望や意欲に寄り添い、成長を支えてくださる当院の環境には、感謝しかありません。

また、同期は30人在籍しており、中四国はもちろん、関東・関西など全国各地の大学出身者が集まっています。私のように岡山に縁のなかった同期も多く、互いに切磋琢磨しながら、日々大きな刺激を受けています。今年度も実直に研修を積み重ねていきたいと思います。

左：舘　健太朗研修医　　右：阪本晋弘研修医

２年目初期研修医の阪本晋弘と申します。１年目の研修生活を振り返る機会をいただき、ありがとうございます。

この１年間は、想像以上に目まぐるしく、多くの学びに満ちた時間でした。中でも印象的だったのは、研修開始２日目に院内での急変に遭遇した経験です。初期対応を行うべきか応援を呼ぶべきか判断に迷っていたところ、上級医の先生方が迅速に対応してくださいました。自分の無力さを痛感すると同時に、「現場で役に立つ医師になりたい」という思いが強く芽生えました。

日々の診療を通じて、病態理解だけでなく患者さんの社会的要因が治療方針や予後に影響する場面を何度も目の当たりにしました。例えば、同じ心不全でも、年齢やADL、家族構成、退院後の支援体制により薬物導入のタイミングや治療目標が変わることを知り、多角的に患者を捉える重要性を実感しました。

２年目となり後輩を迎え、自身の役割と責任をより強く意識するようになりました。未熟さを感じる日々ではありますが、この一年の経験を糧に、今後はより主体的に行動し、チームに貢献できる研修医を目指して努力してまいります。

以上、長くなりましたが最後まで読んでいただきありがとうございました。この１年の学びを今後の成長につなげ、これからも研鑽を重ねてまいります。今後もどうぞよろしくお願いいたします。